

## 【第一話】

「咲姫乃とお姉ちゃんは恋人同士なのに、一年の差があるなんて不平等だと思うの」

二人で暮らすワンルーム。狭い浴室から出てきた妹が突然そんなことを言い出した。

「えーと……不平等というと、どの辺が？」

「それはほら、胸とか！」

「他には？」

「胸とか！」

「他には？」

「おっぱいとか！」

他にはなさそうなので、とりあえず続きを聞いてあげることにした。

「それで、不平等だからどうするの？」

「だから、お姉ちゃんには一年間、人間を辞めてもらおうと思います！」

「人間を、辞める？」

「そう！ 会社も辞めて、私のペットとして、愛玩されてください！」

私もいくら大好きな妹が相手とはいえ、ただいきなり一年間ペットになれだなんて納得いきません。

なので、こんな条件を提案してみます。

「わかった。それじゃあ私が咲姫乃をイカせる前に私のことイカせられたら、ペットになってあげる」

「ふん。望むところよ！」

正直、負ける気がしません。なぜなら、普段エッチするときは、私が攻めになることが多いんです。妹の急所は、心得ているつもりです。その点、妹は私の体について知識が浅いはずでした。

「先手必勝っ！」

私はお風呂上がり妹の体の背後に回り込み、おしりのふもとあたりに指を添わせました。

「ほらあー、ここ弱いでしょ？ 早くあうあう言っつて、早くあんあんイッチャって、お姉ちゃんに負けちゃいなさいよお」

わたしはすぐに咲姫乃が音を上げて、参ったあ、もっともっとお♡ となつて、いつもの流れで布団の上に直行♡ となると思っていました。

けれど、なぜか今日は妹の様子がいつもと違います。

「……………」

私がどれだけフェザータッチを心がけ、必死にさすさす撫で上げて、ちっとも良い反応が返ってきません。

「あ、あれ？　ここって性感帯じゃなかったっけ？」

不安になって、つい本人に聞いてしまいました。すると。

「ああ、ここね。うーん……そこそこ？」

「うそお！　この前はアンアン言ってくれてたじゃん！」

「それはほら、雰囲気込みというか……ぶっちゃけノリ？」

私の先程までの自信はみるみる衰退してしまいました。よろよろとした声で、恐る恐る聞いてみます。

「わ、私ってもしかして、エッチ下手だった？」

「え？　なにを今更」

私はガクッと膝から崩れ落ちます。

「あたしはお姉ちゃんがタチやりたいんだろうな、と思ってネコやってただけど……違ったの？」

「わ、私はただ、一生懸命、咲姫乃のことを気持ちよくさせてあげようって、必死で……」

膝立ちで床に手を付き、自分のこれまでの過ちをくいていると、背中に咲姫乃の小さくて柔らかいおしりを乗せられてしまいました。

「お姉ちゃんってば、案外かわいいんだね♡　ホントはさ、年齢で勘違いしちゃってただけで、私に一方的に攻められたほうが、気持ちよくなれちゃうんじゃない？」

「そ、そんな、こと……」

「ほら。お、ま、た。開いてみせてよ」

ぺち、ぺち、ぺち。と突き出されたままの私のおしりを手で叩かれてしまいました。たったそれだけの刺激なのに、なんと私は下腹部をきゅん、きゅん、きゅん、といわせてしまいました。

「い、今は……その……ダメ」

「ええー、どうして？　なにか私に見られてまずいこともあるの？」

「そ、そういうわけじゃ！」

「じゃあほら！　さっさと脱ぐー！」

「は、はい！」

ぺちんっ！ と、少し強めにおしりを叩かれて、ついそんな返事をしてしまいました。もちろん、下腹部はじゅんと、甘い疼きを覚えてしまいます。

渋々と下着姿になるところを、ジト目で観察させられています。

「おまた、開いてって言ったんだよ？」

「う、うう……」

逆らえる空気ではなく、私は妹の視線を股間に感じながら、かばっと脚を開きました。

「あっはあ♡ やあっぱり濡れ濡れじゃん♡ 予想通り！ お姉ちゃんってば、ちょっろーい♡」

近づいてきてしゃがみこむと、まじまじと覗き込むように、私の濡れ具合を観察されています。

「なあに、この染みのデカさ、やっぱあー♡ 透明なのクロッチからはみ出て溢れちゃってるよ？」

ねーねー、お姉ちゃん？ 興奮しちゃったのお？ 全裸の妹に背中を椅子にしてもらって、おしりもぺちぺちたくさん叩いてもらえて、子宮キュンキュン♡ ってさせて、愛液こぼれちゃったのお？」

貶されているというのに、どうしてこんなにも脳の芯みたいところが痺れてしまうのでしょうか。

恥ずかしさで体が焼かれて、もう気が狂ってしまいそうです。

なのに、なぜでしょう。下腹部の疼きと背筋を流れるゾクゾクが、勢いを増してしまっていました。

「あっは♡ パンティ越しでとろとろ始めちゃったよほおら、おねーちゃん？ 素直になっちゃいなよ。ホントは妹に、いーっぱい、いじってほしい♡」

愛液を指で掬われて、つうー、っとその粘性を見せつけられています。それだけで、また私の下腹部は反応してしまい、妹にとろーりとろーりとあそばれてしまっていました。

つまり、もう観念するしかないのです。

「は、はい……いじって、ほしいです。咲姫乃に……妹の、咲姫乃に、たくさんたくさん、いじりたいんでしゅー！」

最後は興奮で口が回らなくなって、みっともない語尾になってしまっていました。けれど、そんな自分の失態でさえ、妹の喜ぶ顔と一緒に私の中で気持ちよさとして蓄積されてしまうのです。

「はーい♡ よく素直になれました♡ 偉いぞ、お姉ちゃん♡」

ぐいぐいっと、ご褒美の足裏が私のぐしょぐしょまんこを踏みしめてくれました。

「あっひ♡ あっ！ ひんっ！ あんっ♡」

「んもお、お姉ちゃんのそんな情けない声初めて聞いたよ。どうして今まで隠してたの？ 妹にふみふみされたい変態お姉ちゃんだって」

そんなの、気がつく機会がなかった。だって、私は姉で、咲姫乃は産まれた時から妹で。だから、私のほうがしつかりして、お姉ちゃんして、弱いところは見せられないって……。

でも、一つだけ確かなことがあります。

こんなに気持ちいいエッチ、お姉ちゃん初めてです！

「いいのおっ！ いいっ！ いいっ！ いいっ！ いひっ！ いひっ！」

「あーあーもうお姉ちゃんったら、完全に壊れちゃった♡ そんなに妹の足蹴プレイが気に入っちゃったのぉ？」  
もう妹の言う通りなるしか頭は働かなくなっていました。

「参ったぁ？」

「参ったぁ♡ もっともっとお♡」

「あは！ もう姉の威厳の見る影もないね。とっても情けなくって最高だよ、お・ね・え・ちゃん♡」

「も、もうダメえ！ いくのお……下克上アクメきちゃうのお♡ ダメなのに！ おまんこ、妹の足でふみふみされて、ペットイキしちゃうのほお♡」

「ほら、せっかくペットになれるんだから、声真似しながらイッてみせてよ。お姉ちゃんはあたしに、何として飼ってもらいたいのお？」

妹の小さな足でおまんこに全体重をかけられながら、鼻の頭を指で押さえられます。私はほとんど無意識のうちにその動物になり果てることを望んでいました。

「ぶ、ぶひん！ ぶひぶひ、いひながら、いっぢやうぶうううう♡」

ビクンッ！ ビグビグビクビクンッ！

「はーい。一年間、あたしのメス豚ペット確定♡」

こうしてめでたく、私は妹に飼われることになったのです♡

【続く】